

ジャーナリストの卑劣さ

たとえいわれのない批判であっても、それに対する怒りで、このブログのように不特定の人間が読むところで、他者を批判するのは避けたいと思う。しかし、今回は、私たちが批判した人間が、大手の新聞（黄色新聞）の編集委員なので、どのような形であれ、反論する場と機会を持っていると考えられるので、いわれのない批判に反論しておくとともに、何故そのようないわれのない批判を彼がしたがるのかという、私なりの推論を書いておく。良くある正義論にならないように注意しながら書きたい。

私たちは、参加企業と協力して経産省からの資金会援助を得て、震災の被災地 O 町で産業復興のために、さまざまなアイデアや情報を提供するその実行の可能性を確かめるプロジェクトを行っていた。その活動の一環として、企業からの支援を仲介し、企業に資金でコミュニティー・スペース（まあ、公民館のようなもの）が町に作られることになり、それが完成した。コミュニティー・スペースを提供した企業は林業関係の企業で家を作っている。その企業が、企業の社会的責任（CSR）として自分たちの製品を提供することに何の非難すべきところはないだろう。その行為に企業の宣伝活動という意味があったとしても企業が企業の資金でやっていることである。別段非難すべきことではない。黄色新聞だって高校野球や文化活動をするときは自社の名前を前面に出している。企業としての善意を仲介して、町にコミュニティー・ハウスをわれわれが斡旋したとしても、それは善意の仲介で何の非難すべきいわれもない。コミュニティー・スペースで住民が行う活動にはわずかではあるが復興支援の予算が使われる。その資金の獲得には申請書の作成等を東京大学が手伝った。それはコミュニティー・スペースの活動の支援であって研究活動そのものではない。もちろん、予算獲得のプロセスも含めて東京大学はそれらの活動を観察・記録したいと思っている。しかし、そうした研究には東京大学の研究者が別に獲得した資金が使われる。

提供した企業とコミュニティー・スペースを運営する町の団体には、彼らが行う社会活動の内容や効果についてデータ収集を収集させてもらいたいと申し出ている。現在の研究のガイドラインでは、研究に協力してもらうときはその趣旨を説明しなければならない。町の団体や参加者は、納得できなければ協力することを強制されない。個々の調査・研究内容に対する非難はあり得てもそのこと自体を非難することに何の根拠もない。彼が悲憤慷慨して述べているのは、東京大学が復興支援金を研究目的に使っているのだからということである。彼は、私の研究室にも来ているから、この件について私に取材することは可能だ。私は東京大学側のプロジェクトの責任者だから事の経緯を調べて説明することができる。彼は私に取材していない。そもそも、東京大学は教育・研究機関であるから、自分たちが獲得した予算で研究を行うことが本務であり、コミュニティー・スペースの活動予算と、研究に対する経費の予算は全く別の予算として切り離されている。

ついでに言えば、私たちのプロジェクトは本年3月31日をもって解散している。それは、経産省のプロジェクトの期間が終了したからである。経産省から委託された仕事は、町の産業復興のためにアイデアや情報を提供し、その実行の可能性を確かめることである。これらの情報が、他の地域でも利用可能な復興のモデルとなることを期待されていたのである。実際に市民活動を運営したり、産業活動を実施することは、プロジェクトの目的に含まれていない。実際、研究教育機関である大学が、実務を担うことなどできるはずがない。アイデアを提供し、その実行可能性を確かめたのだから、プロジェクトは目的を達した時点で解散すべきである。それ以上継続し、実施段階まで大学が口をはさめば、地元で実際に活動している人々の足を引っ張りかねない。研究と実務は明瞭に分けなければならない。だから、終了の時点で、チームを解散したのである。以前、彼と個人的に話した時に、彼は東京大学が実務もやるべきであるというようなことを言っていた。わかっていないのは彼である。研究予算を復興支援に回すのは、目的外使用で明瞭な犯罪だ。私は、復興予算で研究をする気などさらさらしない。私たちが行ったプロジェクトについて高く評価する人も、不十分として低い評価をする人もいるだろう。それはそれで構わない。プロジェクトそのものに対する批判を、受けるべきは私で、私はそれを避けようとは思わない。もちろん、私たちが行った活動の結果として地域に立ち上がった様々な事業の発展を願わないわけではない。それが良い事業として発展していけば、私たちのプロジェクトの評価も上がるだろう。しかし、それは地元の人がやるべきことであって、私たちがやるべきではない。また、今回行ったプロジェクトは私の研究とは何の関係もない。正確に言えば、プロジェクト活動を通じて、いくつかの研究上のアイデアを拾うことができた。しかし、プロジェクトそのものの代表は頼まれたからいやいやながらやったのであって、負担を考えると、私の研究の足を引っ張る障害以外の何物でもなかった。それでも何とかプロジェクトを終えて解散した。すでにプロジェクトが解散している以上、彼が懸念し非難するようなことは、ありえないのである。

彼が私たちに対する非難して書いた正義の味方のような文章は新聞記事ではない。編集委員だから意見があれば、新聞に書けばよいものと思うのだが、何故か、フェイス・ブックに書きこんだ。ここが面白い。黄色新聞はU記者のこともあるから、さすがに、事実確認が取れていない推測を根拠にして新聞記事には書けなかったのだろう。それでも、何に書かずにはいられないから、フェイス・ブックに書いたということだと思う。その内容は、私にしてみれば、「ハア、何のことですか???'という感じである。ちゃんと調べて根拠をもって書けない。それを書けばまた捏造だと言われる。それでも、根拠もなく正義の味方ぶりたかったので、フェイス・ブックに書いたということだと思う。ここまで来るともはや病気である。表向きやっただけいけないことだからやれない。でもどうしてもやりたいから、フェイス・ブックならば、本務ではないから非難されないとこいついたということだろう。推測するに、多分、彼はこういう気持ちで長いこと仕事をしてきたのだら

う。だとすれば、長期にわたる長患いである。彼が黄色新聞の編集者であるということは、黄色新聞の人たちはほとんど全員この病にかかっているということだろう。反省しろとか、捏造をするとか、倫理的なことを言う気はない。私は、ジャーナリズムが黄色いのは許す。ジャーナリズムとはそういうものだから。しかし、黄色いにもかかわらず、何が何でも白いと言いたいのは病だ。黄色新聞は社員一同、まず、病を治せ。他のマスコミ関係者は、これを他山の石とするように。

(2015)